

平成16年3月31日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430)1111

狛江の念仏講Ⅱ

Ⅱ 各地域の念仏講

現在も念仏講が存続しているのは、上小足立だけになりましたが、各地域の念仏講について、そのあらましを紹介します。

小足立 念仏講中には、上小足立（箕和田）と下小足立の二つの講中があります。念仏講（女念仏）の月並念仏は、戦前までは下小足立にもありました。

上小足立の月並念仏は、暮れや農繁期の5月から8月を除き、まわり宿の都合のよい日に、行われていましたが、戦争中は中止。戦後、食べものが少し出まわってきた昭和27年ごろに再開。共同墓地にある六地藏の前にむしろを敷いて野天で行うようになっていました。ところが、その最中に俄雨にあつて富永武男家に駆け込んで座を移し、それがきっかけになって、昭和30年ごろから、春秋の彼岸明けの日に、このお宅を宿にして行うようになりました。数年前に武男さんが亡くなられてからは、富永泰一家を宿にして続けています。講員は現在28名。分家と移住者（大正期）も加入。平成15年秋彼岸の念仏講参加者は、50歳代から90歳までの14名。各自、墓参をすませて集まります。念仏講の茶菓代などの経費は、各戸から集めている共同墓地の管理費の中から出してもらっています。

念仏の鉦は二つで、音頭取りが二人。百万遍の数珠は、紐が切れて珠も幾つか失くっていたのを、平成6年に富永和男さんの尽力により、神田の仏具屋で修理復元。唱和する数々の念仏のことばは、和男さんの祖母が、おぼえ伝えていたもので、それを富永武男さんが書きとめて複写し、講員に配布。その後、30年近くを経て、平成15年春彼岸には、「念仏回向文」と題した5ページほどの冊子に、作りかえられました。

上小足立の念仏講が、現在も続いているのは、第一に定まった会場のあること、そして講員の大半を占める富永一家の人たちを中心に、講員すべての家が共同墓地を通してのつながりをもっていることも、その一つと思われます。

上小足立には、「なっぱいだ念仏」などといわれていた男念仏がありました。明治2、30年代生まれの人たちが父親から聞いている念仏で、深大寺八十世の人がはじめたものだといえます。深大寺に念仏修行道場があつて、小足立からも男衆が出かけて修行したそうです。木魚を叩いて、「でっかい声して、ナンマイダ、ナンマイダ」と唱えるもので、このような男念仏が行われていた当時の上小足立の戸数は十数戸。

覚東 戸数20戸近くといわれてきた覚東では、村全体が一つの念仏講中。よび名は念仏講中でも、葬式の際の講中で、昔はともかく、月並などで集まることはなくて、葬式の穴端念仏だけだったといえます。

岩戸 東と西の講中に分かれ、この講中を念仏講中ともいいましたが、穴掘り講中とよぶことが多く、女念仏などの念仏講と区別していました。例えば、「西」の中には、昭和の初めごろまでは、原組と五軒屋とがいつしよになった念仏講があつたのが、その後、原、五軒屋それぞれの念仏講に分かれ、これに西組の念仏講を加えた三つの念仏講がありました。穴掘り講中は、そのような念仏講中などとは別に、「西」30戸、「東」の分もほぼ同数の家々で構成する葬式組です。葬式の念仏は昭和50年代までみられましたが、月並念仏などは戦前まであったとも、あるいは大正初年には、もうやっていなかったともいいます。

駒井 上と下の念仏講中があつて、これが葬式講中。月並念仏も行われていましたが、戦争が激しくなって中止。男の年寄りも時には参加していました。上と下とで40戸くらい。葬式の念仏は、昭和50年代まで。

猪方 戦前には猪方60軒といわれ（江戸後期の猪方村は42戸）、上、中、下の念仏講中があり、これが葬式の講中。月並念仏や法事などの頼まれ念仏も、各講中で行われていましたが、念仏講は中組に下組の一部の人が入ったり、中と上もいつしよにやったりもしました。月並の日取りは15日、寒の1月と農繁期の7月8月は休み、暮れに休むこともありました。春秋の彼岸には、中日だけのときもあります。講中の仲間から頼まれることもあつて、多くは、入り、中日、明けの3回。月並念仏のときには、念仏が終わると、かならず「はつせ」をうたい、この後は何でも好きなことをやってよかったそうです。月並念仏をはじめ、彼岸、盆、法事などの念仏行事は、昭和25、6年から30年代の初めに、中止されていきましたが、葬式の念仏は昭和50年代まで行われています。

和泉 江戸後期には戸数 120。昭和 10 年ごろには、中村、下、駄倉、松原、上南、山谷の各講中があつて、このうち松原では、分家、転入などによる家数の増加にともない、東西に分かれ、さらに分かれて、3 講中になっていました。家数の増加によって、講中が分かれたところは、他の講中でもみられます。

それぞれの講中により、念仏行事も少しずつ違いがありますが、戦前には、おおかたのところで、女念仏の月並念仏が行われていました。大正の末とか、昭和 5、6 年までというところ、また戦争中、昭和 30 年ごろ、昭和 50 年代などと、月並念仏が行われなくなった年代は多様です。そのなかから、月並に代表される女念仏が比較的遅くまで行われていた、上南と山谷の例をあげてみます。

上南講中は、上和泉（中和泉）の上組と南組の念仏講中で、講員は上 11 名、南 9 名。月並念仏は昭和 52 年ごろまでありましたが、その 1 年後には念仏講も解散。ここでは月並念仏のとき、祝い唄の「はつせ」で、しめくくりとしていました。「家見念仏」「七福神」などをはじめ、18 篇の念仏和讃を収めた『おねんぶつ帖』（手書き複写 5 ページ）が残されています。

山谷講中は、山谷（中和泉）と、原（和泉本町）の一部から成る講中で、山谷・原講中ともいいます。念仏講中とはいっても、火葬以前には、穴掘り当番などが互助の主要な仕事で、上南講中とは違い葬式の念仏は、それぞれの組ごとに行われました。

山谷では、月並などの女念仏の念仏講が、昭和 50 年ごろまでみられます。原には月並はなく、講中の人たちで、葬式のときの「十三仏」「枕念仏」など、「新仏の念仏」をあげたり、年忌供養や新盆の念仏をあげたりしていました。明治 30 年代生まれの人たちの母親は、熱心にやっていたそうです。昭和 55 年、原の念仏講中として数珠を買う話がまとまり、浅草で大数珠と鉦を買い、新盆の念仏で初めて使いました。

山谷の月並念仏については、大正末の記録があり、当時の月並念仏を知る好資料となっています（三輪善之助「狛江の月並念仏」『武蔵野』8 巻 3 号所収、大正 15 年 8 月）。それによると、山谷の家数は 14 戸。月並念仏は 1、5、6、7、8 月を除いて毎月 1 回、14 戸の家を順々にまわります。日取りは一定せず、講員の相談で決め、定まると前月当番の家から当月当番の家へ念仏の道具（百万遍の数珠 1 連と打鉦 1 個）をまわします。当番の家では夕刻から仏壇に灯明を点じて白団子と菓子を供え、講員の集合を待ちます。集まるのは老若の女ばかりで男は参加しません。念仏は 8 時ごろから始まり、先達は講員中の先輩がつとめます。まず百万遍を 2 回、次に南無地蔵大菩薩云々と唱えて鉦を打ち、それから「念仏の目的たる歌念仏」を唱えます。その歌詞は昔から暗誦で伝えられ、文書に記したものはありません。最後にゴタンダと称するこの地の俗謡をうたって解散します。会が終わると夜中の 2 時ごろ近く、一同に茶菓や甘酒を接待することになっています。もし当番の家が新築開きの時ならば、特に家見の念仏と称し、講員へ赤飯や煮しめを饗応します。また故人の法事に当たる時は法事の念仏と呼び新築と同様の馳走をする習わしでした。

この三輪氏の報告にあるゴタンダ（五反田）というのは、「これさま」とか「はつせ」などとよばれる祝い唄の一つです。山谷の念仏講は、戦争で中断したものの、戦後 2、3 年に復活し、年に 6、7 回、まわり持ちで行われていました。参加者は 16、7 名のときもありましたが、若い人に代がわりして出てこなくなる家も多くなり、葬式のときの「つきあい」だけになって、隣の上南講中がやめる何年か前に、念仏講を解散しました。お念仏の文句は、年寄りが唱えるのを自然におぼえたもので、とくに書いたものはなかったそうです。月並には、終わりに「はつせ」をよくうたったものでした。

念仏講の集まりは、最初はお茶と漬物ぐらいだったのが、しだいに派手になって、月並のまわり宿を引きうけるのが負担になり、参加を遠慮する人も出てきました。月並はそれほどでもなかったのですが、年回（年忌）など供養の頼み念仏では、ご馳走、引き物などの出費も多く、たいへんでした。

大正末から昭和の初めにも、すでに念仏行事の中心でもあった月並念仏が行われなくなったところもあります。戦中、戦争末期にかけては食糧難も深刻になって中止するところも多く、そのまま消失したところもみられます。このような推移のなかで、戦後、食糧事情もやや安定して復活する例もありました。

年寄りの楽しみだった月並念仏をはじめとする念仏講の行事は、昭和 25、6 年から昭和 30 年代の初め、生活改善・新生活運動の流れの中で、次々に中止されていくところもありました。

一方、葬式の際の念仏は、土葬から火葬への変化につれて簡略化していきませんが、昭和の終わりごろまで行われていました。